

鈴木信太郎記念館だより

第12号

追悼 鈴木道彦先生

2024年11月11日、鈴木信太郎の次男でフランス文学者の鈴木道彦氏が95歳で逝去されました。心より哀悼の意を表します。

道彦先生(以下、敬称として「先生」を用います)は、鈴木信太郎記念館に対して多大な貢献をしてくださいました。まず、先生は、記念館の建物、土地、所蔵資料の寄贈者でいらっしゃいます。信太郎の旧宅を国の登録文化財として保存するための準備を始めたのは、道彦先生の兄で、信太郎の長男である建築学者の成文氏^{しげふみ}でした。しかし、2010年に成文氏が急逝され、道彦先生はその遺志を継いでこの住宅と土地を豊島区に寄贈されたのです。これを受けて豊島区では、本住宅を2012年に豊島区指定文化財「旧鈴木家住宅」とし、2018年には豊島区立鈴木信太郎記念館として開館しました。道彦先生によるご尽力がなければ、当館が現在の形で存在することはなかったでしょう。

また、開館までの準備期間や開館後にも、先生は様々な形で当館を支援してくださいました。旧鈴木家住宅の保存・活用委員会へのご出席、10,000点以上に及ぶ膨大な量の資料の寄贈、生前の信太郎や住宅の歴史などに関する知識の共有、運営や展示に関する具体的な助言など、先生のご貢献の大きさは計り知れません。当時の担当職員によれば、特に印象的だったのは、開館準備期間中に信太郎の生前のエピソードを道彦先生からインタビュー形式で聞き取り、映像として記録した時のことでした。事前に打ち合わせておいた事項に沿って担当職員が先生に質問すると、先生は時々自身のメモに目をやりつつも、信太郎との思い出を淀みない口調で生き活きと語ってください、ほとんど映像を編集する必要がないほど無駄のないお話し振りに担当職員も感嘆したということです。このインタビューの様子は、当館書斎棟の廊下に設置した映像機器で視聴することができます。生前の道彦先生のお姿を是非皆様にもご覧いただければと思います。

昨年8月、先生は『鈴木信太郎巴里日記1954』を監修され、まえがきも執筆されました。この書籍は、信太郎が1954年にパリに滞在した際に記した日記を書き起こしたものです。亡くなる数か月前までこのように出版活動に携わられていたことに対して尊敬の念を禁じ得ません。皆様にも道彦先生の最後の書籍をお手に取っていただければ幸いです。

当館では、道彦先生が遺してくださった建物や資料の維持・保全・活用に努め、信太郎の功績を顕彰し、フランス文学研究発祥の地としての意義を広く発信する活動を今後も積極的に行って参ります。

改めて、鈴木道彦先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(奥村 景子)

『鈴木信太郎巴里日記1954』
書影(鈴木信太郎著／鈴木道彦監修、関月社、2024年)



(上) 獨協大学オープンカレッジで講演する道彦氏、(下) 講演会場の様子(2017年3月4日)
写真提供: 鈴木松子氏



お気に入りの縁側でのひととき

年代の異なる3つの建物で構成される当館の建物。その西側に位置する「座敷棟」には、建物の北側と南側にそれぞれ縁側が設けられています。8畳からなる書院座敷と6畳からなる次の間に並行して設けられた南側の縁側は、庭に面して掃き出しのガラス戸が連なる開放的な造りとなっており、ガラス戸越しに庭の植物の様子や季節の移ろいを楽しむことができます。

この南側の縁側は、鈴木信太郎の長男・成文^{しげぶみ}のお気に入りの場所でもありました。日々の暮らしの様子を綴った成文の著書『文文日記』の中には、成文が縁側でのひとときを楽しむエピソードが度々登場します。成文は、この場に寝転んで読書をしたり、午後の日差しを浴びながら昼寝をするのが好きだったそうで、ある日の日記には、次のような文章が手描きのスケッチと共に記されています¹。

追分²ではデッキチェアーが最高だったが東京の家では縁側がいい。

座敷の南北を開け放し風を通して寝転んでの読書が気持ちいい。³

晴れた日の縁側での読書。何とも贅沢な時間です。風にそよぐ草木の様子や、日向の心地よさが伝わってきます。

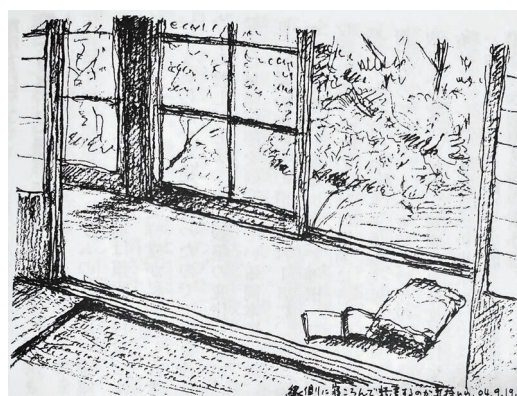
庭と座敷の間に位置する縁側は、建物の内と外をつなぎ、空間に一体感を持たせる役割も果たしていました。成文は「縁側で庭と一体になった様な家に住んでいると自然と親しむことになる」⁴と述べ、自然を身近に感じる暮らしの醍醐味についても日記の中で繰り返し言及しています。

成文の日記は、家の中の何気ない場所に宿る暮らしの記憶や住人たちの生活の様子を今に伝えてくれます。書斎を愛した信太郎、縁側を好んだ成文。鈴木家の家族がそれぞれ家の中に愛着のある場所を持っていたように、ぜひ皆様も記念館の中にお気に入りの場所を見つけてみてはいかがでしょうか⁵。

(笹川 貴吏子)

【註】 1. 鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅲ』p.124 九月十九日の記述。／2. 成文が所有していた軽井沢の別荘を指す。／3. 前掲書『文文日記——日々是好日Ⅲ』p.123 九月十九日の記述。／4. 同左p.230 二月二十七日の記述。／5. 成文が居住していた頃の庭と現在の庭は、植栽や雰囲気などがかなり異なっています。

【参考文献】 旧鈴木家住宅調査団『旧鈴木家住宅調査報告書』、旧鈴木家住宅調査団、2011年／鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅲ』、文文会KOBÉ、2005年／同『文文日記——日々是好日Ⅳ』、文文会KOBÉ、2006年



成文が描いた縁側のスケッチ

絵の右下には、「縁側に寝転んで読書するのが気持ちいい」という一文が添えられている。

2025年度「信太郎の愛蔵書」コーナー 展示替え

本年4月、当館書斎内の「信太郎の愛蔵書」コーナーの展示替えを行い、『パリの信太郎 en 1925—100年前の留学事情—』の展示を開始します。この展示では、信太郎が1925年に初めてフランスに留学してから本年がちょうど100年の節目に当たることを記念し、パリ留学中の信太郎に関する資料を公開する予定です。会期や展示内容の詳細等については、今後ウェブサイトやX(旧 Twitter)などでお知らせしていきます。なお、展示替えに伴い、下記の期間は臨時休館となります。ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

臨時休館期間：2025年4月18日(金)～25日(金)(予定)



渡仏前の信太郎(1925年、30歳)

鈴木信太郎記念館2024年度事業報告

鈴木信太郎記念館コレクション「三人の隠士たち—^{いんし}碎巖・^{さいがん}春耕・^{しゅんこう}碧山—^{へきざん}」

10月1日から12月15日にかけて、豊島区立郷土資料館開館40周年記念収蔵資料展「としま文学プロムナード」の同時開催展として、鈴木信太郎記念館コレクション「三人の隠士たち—^{いんし}碎巖・^{さいがん}春耕・^{しゅんこう}碧山—^{へきざん}」を、郷土資料館の常設展示室大ケースにて開催いたしました。本展では、南画家の高森^{なん が か}碎巖^{たかもり さいがん}(1847-1917)と西田^{にし だ}春耕^{しゅんこう}(1845-1910)、漆工の青山^{あおやま}碧山^{へきざん}(1847-1924)らによる初公開作品を中心に、当館所蔵の作品と資料を展示しました。

本展示では、高森碎巖、西田春耕、青山碧山という3人の芸術家の作品や関連資料を通じて、鈴木家と3人の関係性、信太郎に与えた影響などを紹介しました。信太郎は彼らを「世俗に^{おもね}ならず、名利を^{めいり}追わず、独り楽しんで自己の芸術^{げいじゅつ}境^{きょう}に^{とうすい}陶醉^{とうすい}」していた「風格のある^{いんし}隠士^{いんし}」と称しています¹。文人のような生き方が彼の心に刻まれ、文化に対する理解を深めていったことが^{うかが}窺^{うかが}えます。

展示作品には、高森碎巖の^{あまくさ}《天艸^{あまくさ}洋図^{なだす}》をはじめ、掛け軸や漆絵の額、盆などの作品のほか、信太郎が熱中した^{てんこく}篆刻^{てんこく}の関連資料も含まれていました。また、谷崎潤一郎を経て入手した^{とみおか}富岡鉄斎^{てつさい}(1836-1924)作の^{とういん}陶印^{とういん}も初公開しました。



展示会場風景

展示に際しては、郷土資料館の常設展示室大ケースを利用し、分館である当館にとって、新たな試みとなりました。また、レファレンスルームでは、信太郎の生涯と当館に関するパネルや映像作品を展示し、来場者の皆様により深く理解いただけるように努めました。さらに、当館では、高森碎巖の^{しょうけい}《^{さんすい}稗景山水図^ず》^{しょうけいさんすいず}原本を11月1日(金)から7日(木)[5日(火)は休館]にかけて期間限定で初公開しました。

今回の展示は、信太郎と3人の芸術家たちの関係性を考察し、鈴木家の文化的遺産に対する理解を深める機会となりました。今後も多彩な活動を行っていきたいと考えております。

【註】1. 鈴木信太郎「古風な思出」『文学遁走』改造社、1949年、p.376。

口演会「和室で楽しむフランス文学～神田伊織の講談『レ・ミゼラブル』①～」

開催日時：2024年11月9日(土) 10:30～12:00

会場：鈴木信太郎記念館(座敷棟)

内容：講談口演

出演：講談師 神田伊織氏

参加人数：19名

11月9日に講談イベントを開催しました。大学および大学院でフランス文学を専攻した講談師の神田伊織さんをお招きしての今回の講談では、演目『海賊退治』ほか、ヴィクトル・ユーゴーによるフランスの歴史小説



高座で熱演する神田さん

『レ・ミゼラブル』を題材にした演目の第1話を披露いただきました。口演では、神田さんの生き活きとした語り口や、魅力溢れる登場人物たちの描写、物語に緩急をつけるみごとな張り^は扇^{おうぎ}さばきに観客一同が魅せられました。参加者からは、次回開催を心待ちにする声も寄せられ、大変盛況な会となりました。

口演会「マンガトーク&RAKUGO chez 信太郎」

開催日時：2024年12月14日(土) 14:00～15:30

会場：鈴木信太郎記念館(座敷棟)

内容：第1部 マングトーク

第2部 RAKUGO口演

出演：落語パフォーマー シリル・コピーニ氏

EUROMANGA合同会社代表・編集長 フレデリック・トゥルモンド氏

参加人数：14名

12月14日に「マンガトーク&RAKUGO ^{シェ} chez 信太郎」を開催しました。第1部では、フランス人落語パフォーマーであるシリル・コピーニさんとマンガを通じた日仏の文化交流に携わるフレデリック・トゥルモンドさんによる、日本とフランスのマンガを題材にしたトークショーを行いました。トークショーでは、フランス語圏のマンガである「バンド・デシネ(bande dessinée)」の特徴や日本の週刊マンガ、コミック版との違いのほか、フランスで人気の日本のマンガについてお話いただきました。海外の方の視点による日本のマンガ談議は大変興味深く、学びの多い時間となりました。第2部ではシリルさんによるRAKUGOの口演をお楽しみいただきました。一席目では、『時うどん』を日本語にて披露いただき、二席目では『寿限無』を日仏同時通訳にて口演いただきました。日仏両言語を交えたシリルさんの落語パフォーマンスに、会場は始終笑いに包まれました。



マンガトークの様子



ユーモア溢れるシリルさんの落語パフォーマンス

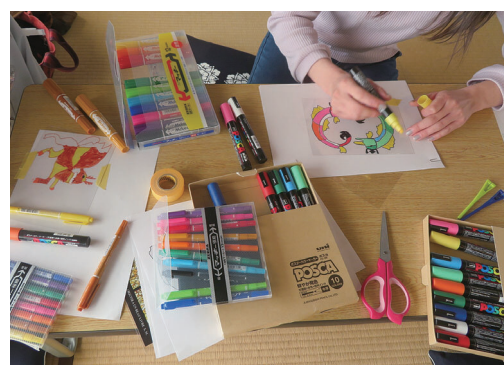
体験教室「クリスマス・オーナメントづくり」

開催日時：2024年12月22日(日) 13:30～14:30

会場：鈴木信太郎記念館(座敷棟)

参加人数：2組5名

12月22日に親子向けの体験教室として、「クリスマス・オーナメントづくり」を開催しました。館内にある様々な意匠・デザインの中から気に入ったものをスケッチしてもらい、その絵をもとにプラバン(プラスチックの板)のオーナメントを作成しました。一番人気のデザインは、やはり書斎棟のステンドグラスでした。創意工夫を凝らした手作りのオーナメントは、参加者それぞれの個性が溢れる美しい作品に仕上がりました。また、伝統的な書院造である座敷棟での本イベントは、毎年参加者の皆さんに大変喜んでいただいております。今回も懐かしさを感じていただきながら新たな発見のある貴重な体験となったことと思います。



オーナメントづくりの様子

(徳力 まもり、奥村 景子、笹川 貴吏子)

鈴木信太郎記念館だより 第12号

発行日 2025年3月28日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS